

解剖学の歴史

～人体解剖の始まり～

『人体解剖学』

ホヴァルト・ビドロー著, ヘラルト・デ・ライレッセ画

ホヴァルト・ビドローが1685年に出版した『人体解剖学』は、105枚の銅板画を収録しています。静物画のような繊細さを持った本書の銅版画は、銅版画による人体解剖表現の頂点とも言われています。

ビドローは神経は管状器官であるという当時の学説を覆し、その形態を正しく解明しました。

1754年（宝暦4年）

山脇東洋が日本で初めて人体解剖を実施。1759年には日本初の解剖書『蔵志』を刊行。

『分娩図解』

ウィリアム・スメリー著, ヤン・ファン・リムダイク画

『分娩図解』は、産科医であるウィリアム・スメリーが記した図解で、当時、誰も見たことがなかった解剖図を収録しました。スメリーは産科学の草分け的存在で、科学的産科学の祖とみなされています。

弟子であるウィリアム・ハンターは、1774年に出版した『妊娠子宮解剖図』において、同画家による銅版画で、妊娠の各段階における母体と胎児を示しています。

このような医学書の登場により、順序だった助産術の教育が生まれました。また、スメリーにより、分娩技術の向上、分娩鉗子の改良、逆子の分娩方法が考案されました。

1774年（安永3年）

杉田玄白、前野良沢が『解体新書』を翻訳し、刊行。

- 参考文献
- ・ジェリー・アンダーソン [他] 著, 矢野真千子訳
『アートで見る 医学の歴史』河出書房新社, 2012
 - ・ベンジャミン・A・リフキン [他] 著, 松井貴子訳
『人体解剖図』二見書房, 2007
 - ・坂井建雄著『人体観の歴史』岩波書店, 2008

紀元前三世紀

アレクサンドリアにおける人体解剖

脳こそが神経系の中心器官であり、知性の座であるとヘロフィルスが主張

1304年

ボローニャで初の公開解剖が実施され、医学教育に必要な科目として重要性が認められる

1543年（スイス）

アンドレアス・ヴェサリウス『ファブリカ』刊行

世界初の医学書で、文章よりも挿絵を重視している。ヴェサリウスの研究は観察に基づく解剖学の基礎となり、人体を目視することの重要性を知らしめた

1685年（オランダ）

ホヴァルト・ビドロー『人体解剖学』刊行

1722年（ドイツ）

ヨハン・アダム・クルムス『解剖学表』刊行

後にオランダ語版『ターヘル・アナトミア』が杉田玄白らによって翻訳され『解体新書』として刊行される

1754年（イギリス）

ウィリアム・スメリー『分娩図解』刊行

1774年（イギリス）

ウィリアム・ハンター『妊婦子宮解剖学』刊行

1832年

イギリスで解剖法が施行し、合法的に遺体を切開できるようになる